

93 無意味な《マタイ論争》

上野真弓氏のブログ（2015/10/24）への見解

2024（改訂版）

真鍋友範

1 ブログ・誰がマタイなの！？《ローマより愛をこめて》

上野真弓氏は、ブログの中で、ローマ・カトリック教会側美術史学者の《聖マタイの召命》への見解を、分かりやすく4つの観点で提示して下さっている。

そこで、この4つの観点を根拠に、ローマ・カトリック教会側美術史学者と、日本のドイツ学派美術史学者への、反論を明快に提示したい。

まずは、先に、上野氏のブログをご覧いただき、その内容と照らし合わせながら読んでいただきたい。

結論から申し上げるなら、【双方ともに誤りであり、論争の価値はない。】

2 4 観点への反論

① について

400年以上前にイタリアの美術史家のベッローリが、偏見に満ちた《聖マタイの召命》解釈を行い、以後、彼に続くローマ・カトリック教会派の学者は、この見解を正式見解とし、疑うこともなく、その権威を後ろ盾に、内容の再検証も十分に行わなかった。盲目的にベッローリの400年前の旧説に従い、自分の目で見るといふ、最低限の再研究の態度も示さなかった。また、当サン・ルイージ・デイ・フランチェージ聖堂コンタレッリ礼拝堂の、正面から見ることのできない、暗い展示環境を放置し続けた。

この状態で、【聖マタイは、自分を指さす老人だ】という美術史家ベッローリの誤った判断が生き続けた。その結果、多くの文献で誤った見解が記載されたままになっている。大多数の人が言うから、即それが正しいとするのは誤り

だ。再検討が必要だが、ローマ・カトリック教会関連美術史家の不勉強で頑固な態度では、真実は永遠に解明されないのだ。

② について

確かに、3連作のうち、この《聖マタイの召命》だけが、マタイが若者であるなら、調和がない。ここは同感だ。

3連作の調和という観点でも、マタイは老人である方が、より調和するという見解には同意できる。

しかし、そこに【老人は二人いる】。質問する髭の老人と、隣の眼鏡を持って机に寄りかかる収税史の老人の二人だ。

何故、【隣の眼鏡を持って机に寄りかかる収税史の老人】、と考えないのか。

聖書マタイ伝によると、イエスに呼ばれたマタイは、【椅子から立ち上がった、とは記載されず】、ただ、【立ち上がりイエスに従った人物】だ。

どちらが、より聖書に忠実な表現かは、明白だろう。

③ について

確かに、当時のローマ市民の教養レベルは低かったかもしれないが、礼拝堂がもっと明るく、正面から画面を見ることができたなら、画面右隅にさりげなく描かれている【イエスの、開いた左手】や、【イエスの、左側に一步踏み出した右足】が見えた筈だ。

ローマ・カトリック教会の、ローマ民衆への鑑賞配慮が行き届いていれば、目の肥えた当時のローマの民衆には、内容を正確に理解した筈なのに、ローマの民衆に誤解を与えた責任は、劣悪な展示環境を放置したローマ・カトリック教会にあるだろう。

カラヴァッジョの意欲作は、ルネサンス絵画のように、単純に一目で理解される絵画ではなかったのだが、民衆を指導できる立場にあったローマ・カトリック教会は、残念なことに、美術史家ベッローリの誤った絵画読み取りに追従して400年間に渡り誤指導をしたのだ。

カラヴァッジョは、不鮮明な動作は一切描いていない。明確でリアルな身体動作だ。身体動作の発生した順序で、一つひとつを順に読み取れば、ローマの民衆も、『誰がマタイなのか』、と悩むことなく、最後に劇的な聖マタイ本人との出会いの感動を味わえた筈だ。

ローマ・カトリック教会は、当時のローマ民衆の教養レベルのせいにするのではなく、正面から鑑賞できない、しかも暗い展示環境の放置を反省すべだ。

④ について

確かに、デッサンを正しく読み取るなら、決して、老人の人差し指は、若者の方を向いていない。カラヴァッジョは、【絶対に若者を示すようには描いていない。】

髭男の左手の人差し指は、ローマ・カトリック派が言うように、【確かに、途中でゆるく内側に折れ曲がっている。（角度にすれば10度くらい）】

ここまでは、ローマ・カトリック教会に同感だ。

【人差し指は、若者を示している】、とするドイツ学派の美術史家は、無理なこじつけを行っている。表現を見る限り、デッサン上は誤った解釈だ。

仮に、髭男が、右45度斜め前にいる若者を示すなら、指は半分の長さに描かれた筈。（カラヴァッジョは作品《エマオの饗宴》に於いても、イエスの言葉に驚く人物の指を、短縮法で短く描いている。）

つまり、カラヴァッジョは、正確に人差し指を描いている。

しかし、重要な注目点がある。

髭男の左手の人差し指は【90度に曲げた髭の男自身を指差す表現でもない。】

自身を指差す中途場面だとする主張なのだろうが、これは、宮下規久郎氏の研究における【カラヴァッジョは人差し指を自分に向ける表現では使っていない】という研究成果が、正しいと考えられる。

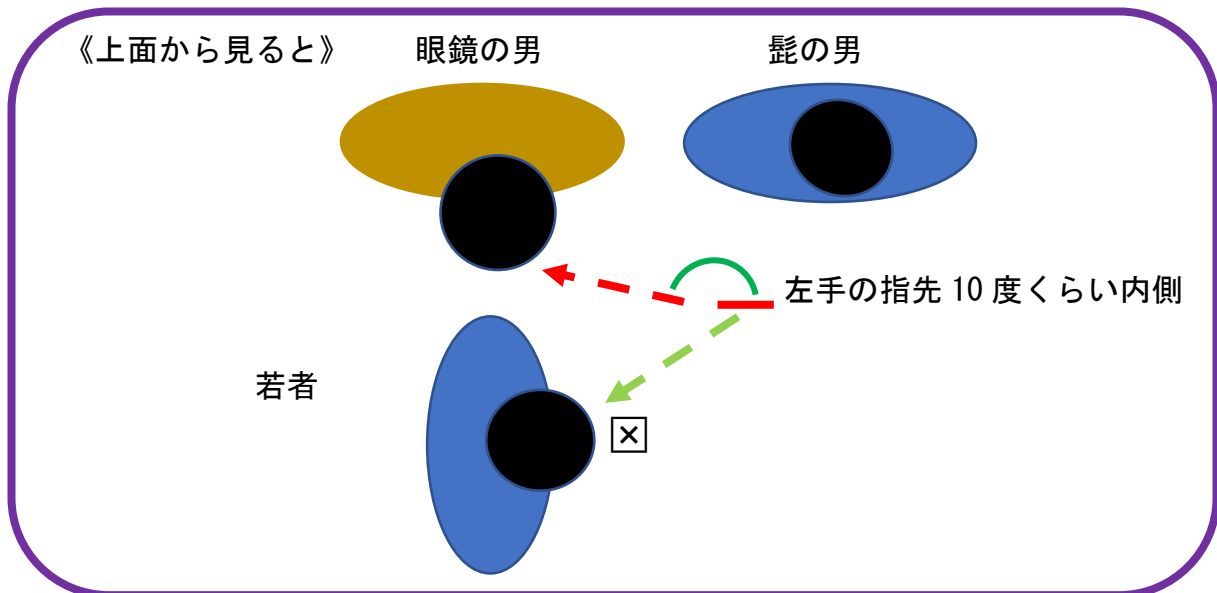
ただ、問題はこれから先にある。

【両者ともに、質問する髭男の左手の親指が、立っていることを説明していない。】

無意識に指を立てる人など、いない。『子供時代のギャングごっこの習慣が残っているからピストルマークで指差した』、などの説明には説得力がない。ピストルはまだ発明されていない時代。【この親指には重要な意味がある。】

理由は、【カラヴァッジョの開発した連続動作の描写】にある。

【髭の男が2段階連続の身体動作で質問した直後の映像が描かれている。】
 その意味は、「お探しの人は、私ですか、それとも隣のメガネの人ですか」
 だ。

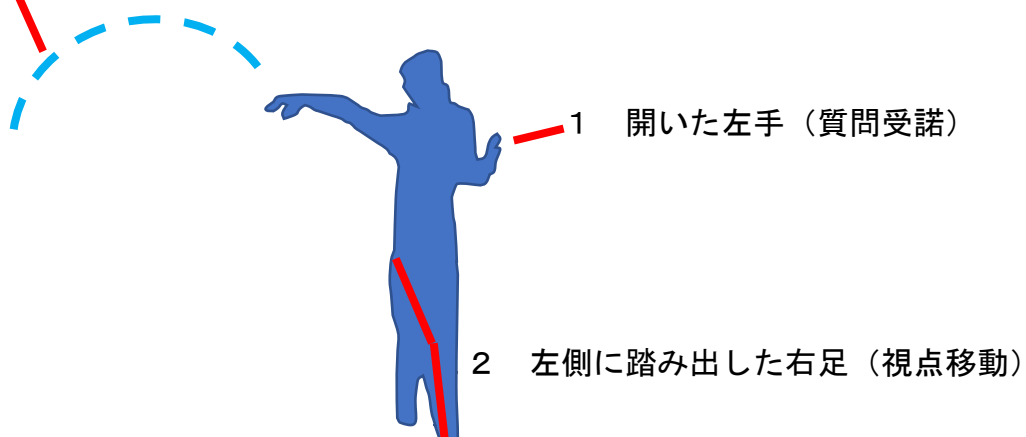


カラヴァッジョの開発した連続動作を読めるか否か、こそ、バロック絵画を
 理解しているかどうかの、【理解度の分岐点】なのだ。

質問を受けたイエスは、3段階の連続動作で正確に相手を示している。
 繰り返すが、疑念なく正確に、である。これは複雑な身体動作だ。
単純な指差し動作ではないのだ。

《イエスの3段階回答動作》

3 回転させた右手・手首より先に力無し・手の止まる位置は、眼鏡男の顔
 付近（絶対に指差し動作ではない。）意味は、「あなたの向こう側」



イエスは、1. 2. 3. の順に連続動作を行い、召命を完結した。

*ローマ・カトリック教会派学者やドイツ学派美術史家は、イエスの、上図1、2の動作を無視している。その結果、3の動作を【指差し動作】だと、完全に誤った認識に至っている。

カラヴァッジョは、誰が見ても明確であるように、イエスの3連続身体動作を描ききっている。

3 結論

もう、解っていただけただろうか。【マタイ論争は、無意味なのだ。】

カラヴァッジョの描いたすべての連続身体動作を順に再現した後で、観衆が劇的な形で聖マタイとの出会いを体験するという、驚きのカラヴァッジョの創作したバロック絵画世界なのだ。

西暦1600年のローマ中が大騒ぎとは、静的不動のスナップ写真的な表現のルネサンス絵画と決別した、まさにこの連続動画で、リアルなバロック絵画との出会いへの民衆の驚きであったのだ。

.....

以上、疑問提示ブログの上野真弓氏に対し、時空間を超えての感想を申し上げたい。

同時に、カラヴァッジョへの愛をこめて、不勉強なローマ・カトリック教会美術史家、カラヴァッジョの革新的バロック絵画の本質が理解されていないドイツ学派美術史家に対して、明確な反論を送りたい。

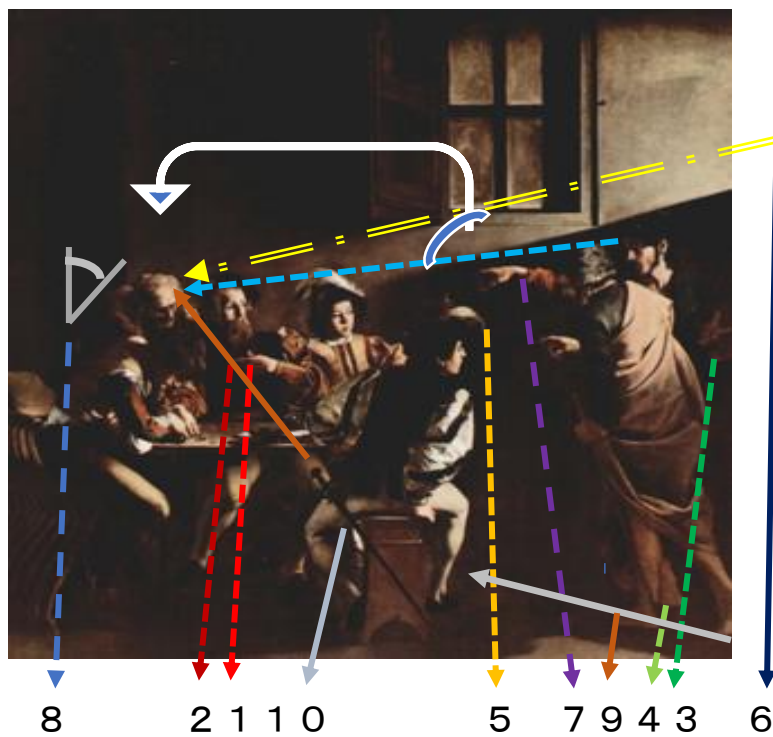
2024/6/1

参考：



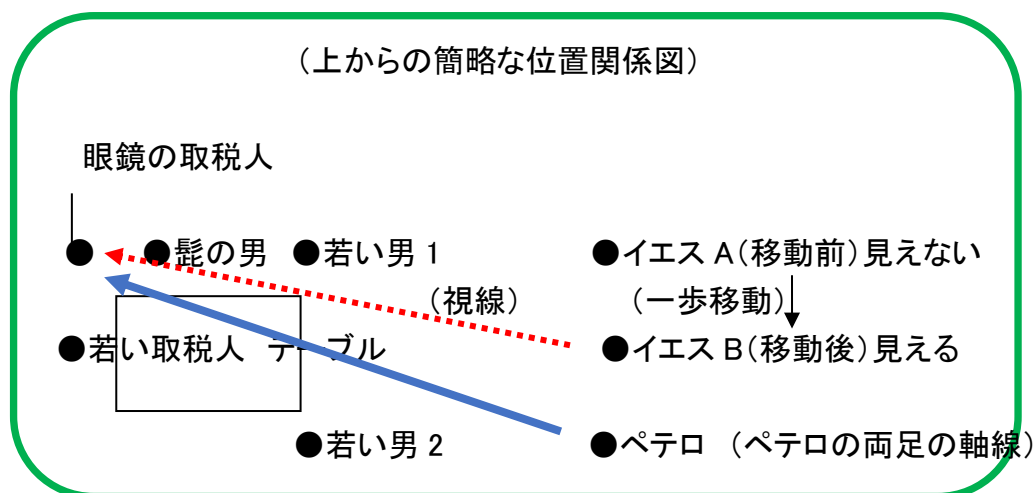
【イエスに呼び出されたのは、眼鏡の収税人なのだ。】

4 《聖マタイの召命》 真実のストーリー



1) 親指を胸に当てる髭男の動作「私をお探しですか」

- 2) 人差し指の動作「それとも、隣のメガネの収税人ですか」
- 3) イエスの開いた左手による質問受容動作【答えよう】の意味
- 4) 右足の一步左側への位置移動
その意味は【メガネの収税人の顔が見える位置への視点移動】
- 4) の補足説明図 * イエスが一步だけ左側に右足を踏み出した理由
帰ろうとしているのではない。



- 5) イエスの右腕・手首の回転動作
【手首より先に力無し・指差し動作では無い】
- 6) イエスが向こう側のポーズで眼鏡の収税人を呼び出すとき、眼鏡の収税人の頭頂部には、父なる神からの導きの光線が、西側高窓からの一条の光となり差し込み、光点となっていた。
- 7) イエスの廻した手が止まる位置は、召命対象者：眼鏡の収税人の顔付近。イエスの目と手の甲を結ぶ延長線上に、目指す対象人物がいる。
- 8) イエスに呼ばれたマタイは、(机に寄りかかった姿勢から) 立ち上がり、イエスに従ったのだ。(注：マタイ福音書に、マタイは、椅子から立ち上がったとは記述されていない。) * 立っていると誤解されがち。立っていない。* 背中との角度は45度。誰が真似ても、右手を机につく3点維持姿勢。
- 9) ペテロの両足間の軸線は、眼鏡の収税人の足元に向かっている。若い収税人ではない。
- 10) 背を向けて腰掛ける若い納税者一員の腰の剣の視線誘導軸線は、眼鏡の収税人の頭頂部の光点に向かっている。
《聖マタイの殉教》では逆方向の視線誘導軸線がある。

カラヴァッジョの全ての描画内容を読み取ると、【召命対象者とは、眼鏡の収税人である】ことを明確に示している。

従って、【マタイ論争は、意味がない。両論共に誤りなのだ。】実りない論争を40年近く継続し、時間を浪費したのだ。そこに結論は存在しないのだ。